

## 教壇に立ってわかる 教えることの難しさ

今村圭

京都産業大学外国語学部助教

私が大学教員として中国語を教えるようになって、早くも4年目を迎えた。最初の2年間は非常勤講師として、第二外国語で中国語を学ぶ学生を教えた。そして、昨年、現在の本務校である京都産業大学に助教として着任し、中国語専攻で中国語を専門に学ぶ学生を教えることになった。

中国語の授業に関しては、専門に学ぶ学生であろうが、第二外国語で学ぶ学生であろうが、少しでも中国語ができるようになってほしいという気持ちは変わらないので、個人的にはやることにほとんど変わりはないと思っています。文法などの解説はできるだけ丁寧にするよう心掛けている。ただ解説が長過ぎると学生の集中力も落ちてしまふので、適宜発音してもらったり、練習問題を解いてもらったりしている。また、学生のモチベーションの向上につ

ながればと、中国の文化などに関する話も時々織り交ぜるようにしている。学生からの授業アンケートでは、丁寧な解説でわかりやすいという評価を多くもらえており、このままのスタンスを続けていきたいと思っているが、悩ましい点も存在している。私が大学生の頃は多くの学生が電子辞書を使用しており、授業中に気になったことがあった際には、その場で電子辞書を引くなどしていた。今の大学生に電子辞書を持っているか聞いてみたところ、持っている学生は極少数で、ほとんどの学生はインターネット上の辞書を引いているとのことであった(残念ながら、私の担当しているクラスでは紙の辞書を持っている学生はいなかった)。最近のインターネット上の辞書などには、良いものもあるのですが、それを使用すること自体に問題はない。しかし、授業中に調べようとする、携帯電話をいじることになる。教員からすると、辞書を引いているのか、携帯電話で遊んでいるかの区別がつかない。授業中に携帯電話をいじるのを禁止するのも1つの方法かもしれないが、気になったことがあれば、積極的に辞書を引いてほしいと思ってしまうので、それは避けたい。現時点では、学生に聞きたいと思わせるような授業を行うよう努力するとともに、専攻の

外国語の授業が少人数で行われている京都産業大学の良さを活かして、学生一人一人と信頼関係を築いていくことで解決したいと思っている。

私は中国語の授業の他に、中国語の文法などに関する講義形式の科目も担当している。講義形式の科目は専任教員になってから教え始めたので、まだまだ経験が足りず、試行錯誤の日々である。最初はパワーポイントを用いて授業中に投影するスライドを作成し、学生にはそれをもとに作成したレジュメを配って授業を行っていた。ただ、教員が一方的に話す講義は学生にとっては集中力を維持するのが難しそうに見えたため、早い段階から工夫する必要があると感じた。そこで、他の先生方に相談することや研修会に参加することなどを通して、90分フルに話すのではなく、最初に前回の振り返りを入れることやレジュメを穴埋め形式にするなどの知見を得て、すぐに取り入れた。改善は概ね好評で、穴埋め形式を楽しんでいる学生が何人もいたことは驚きであった。

専任教員としての1年目はなんとか無事に講義科目を終えることができたが、2年目は新たな問題に直面している。講義科目の受講者の数が2倍に増え、授業によっては

60人近くの学生がいる。増えた原因は様々であろうが、これだけの人数がいると、語学に興味があるというよりは、単位が必要で出席しているだけという学生もおそらく含まれており、内職や睡眠学習をする学生が増えた。傲慢かもしれないが、せつかくこの授業を履修してくれているのだから、こういった学生にも語学に関連した事項を少しでも学んでほしい。そのためにも、今後はアクティブラーニングの要素を少しでも加えることで、講義形式の授業に変化を加えていきたいと考えている。

教壇に立つようになってから、自分が大学時代にお世話になった先生方は、どのように授業をしていたかと思いつくことが度々ある。残念ながら、当時は中国語を学ぶのに必死で先生方の授業方法などは少ししか覚えていないが、ゼミなどは印象に残っている。今回は紙幅の都合で触れられなかったが、私は研究演習(ゼミ)も担当している。自分が大学時代に所属していたゼミの恩師のやり方を参考に、中国語の文献講読を行っているが、どうにも恩師が行っていたようにうまくはできません、改善点ばかりが浮かぶ。今後もう少しでも良い授業を提供できるよう、学生とともに成長していきたい。